

## リレー コンサート C 歌手と器楽奏者による「モーツァルト・ガラ・コンサート」Vol.2

サウスホール 14:30開演(16:00頃終演予定)

W.A.モーツァルト W.A.Mozart	
セレナード 第13番 ト長調 K.525 「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」より 第1楽章 1st movement from Serenade No.13 in G Major K.525 “Eine Kleine Nachtmusik”	神谷 未穂/礒 絵里子(ヴァイオリン) 赤坂 智子(ヴィオラ) 中木 健二(チェロ)

クラリネット五重奏曲 イ長調 K.581「シュタードラー」より 第1楽章 1st movement from Clarinet Quintet in A Major, K.581 “Stadler”	吉田 誠(クラリネット) 礒 絵里子/神谷 未穂(ヴァイオリン) 赤坂 智子(ヴィオラ) 中木 健二(チェロ)
--	--

クラリネット五重奏曲 イ長調 K.581「シュタードラー」より 第1楽章 1st movement from Clarinet Quintet in A Major, K.581 “Stadler”	吉田 誠(クラリネット) 礒 絵里子/神谷 未穂(ヴァイオリン) 赤坂 智子(ヴィオラ) 中木 健二(チェロ)
--	--

2台のピアノのためのソナタ ニ長調 K.448より 第1楽章 1st movement from Sonata for 2 Pianos in D Major, K.448	三浦 友理枝/浜野 与志男(ピアノ)
---	--------------------

2台のピアノのためのソナタ ニ長調 K.448より 第1楽章 1st movement from Sonata for 2 Pianos in D Major, K.448	三浦 友理枝/浜野 与志男(ピアノ)
---	--------------------

歌劇「フィガロの結婚」 K.492より “恋とはどんなものかしら” “Voi che sapete” from Opera 《Le nozze di Figaro》	鷺尾 麻衣(ソプラノ) 浜野 与志男(ピアノ)
---	----------------------------

歌劇「フィガロの結婚」 K.492より “もしも踊りをなさりたければ、伯爵様” “Se vuol ballare, signor contino” from Opera 《Le nozze di Figaro》	森 雅史(バス) 浜野 与志男(ピアノ)
--	-------------------------

歌劇「フィガロの結婚」 K.492より “5・・・10・・・20・・・30” “Cinque...dieci...venti...trenta” from Opera 《Le nozze di Figaro》	鷺尾 麻衣(ソプラノ) 森 雅史(バス) 浜野 与志男(ピアノ)
---	--

歌劇「フィガロの結婚」 K.492より “恋人よ早くここへ” “Deh vieni non tardar” from Opera 《Le nozze di Figaro》	鷺尾 麻衣(ソプラノ) 浜野 与志男(ピアノ)
--	----------------------------

歌劇「ドン・ジョヴァンニ」 K.527より “窓辺においで” “Deh, vieni alla finestra” from Opera 《Don Giovanni》	森 雅史(バス) 浜野 与志男(ピアノ)
--	-------------------------

歌劇「ドン・ジョヴァンニ」 K.527より／戸田 有里子 編 From Opera 《Don Giovanni》(arr. Y.Toda)	鷺尾 麻衣(ソプラノ) 森 雅史(バス) 三浦 友理枝/浜野 与志男(ピアノ) 吉田 誠(クラリネット) 神谷 未穂/礒 絵里子(ヴァイオリン) 赤坂 智子(ヴィオラ) 中木 健二(チェロ)
--	---

朝岡 聡(ナビゲーター)	
--------------	--

W.A.モーツァルト(1756～1791)  
セレナード 第13番 ト長調 K.525  
「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」より 第1楽章

W.A.モーツァルトのセレナード13番は1787年8月10日の完成日付を持ち「小さな夜の音楽」と名づけられている。セレナードは本来、恋人の窓の下で愛を語る声楽曲だったため、器楽曲に転じても戸外演奏用として音量の大きな管楽器を含むが、この曲はなぜか管楽器ぬきの弦5部4声で書かれている。第1楽章は澁刺とした応答主題から開始される。

クラリネット五重奏曲 イ長調 K.581「シュタードラー」より 第1楽章

モーツァルトはウィーンでアントン・シュタードラー(1753-1812)というクラリネットの名手と知り合い、彼のためにこの五重奏曲を書いた。曲は1789年12月22日にブルク劇場でシュタードラーがクラリネットを受け持って初演された。第1楽章は冒頭で弦楽四重奏が端正な主題を呈示し、クラリネットの幅広い分散和音がその合間を縫う。

2台のピアノのためのソナタ ニ長調 K.448より 第1楽章  
1781年5月、宮仕えを捨てたモーツァルトはウィーンで独立生活を開始し、上流階級の子役にピアノを個人教授する。その教え子の一人アウエルンハンマー嬢との共演のために書かれた本作は同年11月23日に師弟共演によって初演され大成功を収めた。第1楽章は両ピアノが力強い第1主題を呈示して始まり、やがて第2ピアノが柔和な第2主題を示す。

歌劇「フィガロの結婚」 K.492より  
1786年5月にウィーンで初演されたオペラ「フィガロの結婚」は、ロッシーニ他がオペラ化している「セビリャの理髪師」の後日物語。前作で理髪師だったフィガロはアルマヴィーヴァ伯爵の恋を成就させた手柄により伯爵の召使にとりたてられ、伯爵夫人の侍女スザンナとの結婚を目前にしている。ところが、伯爵は封建領主の特権である「初夜権」をスザンナに行使しよう目論む。それを知ったフィガロは伯爵を懲らしめる。

歌劇「フィガロの結婚」 K.492より  
1786年5月にウィーンで初演されたオペラ「フィガロの結婚」は、ロッシーニ他がオペラ化している「セビリャの理髪師」の後日物語。前作で理髪師だったフィガロはアルマヴィーヴァ伯爵の恋を成就させた手柄により伯爵の召使にとりたてられ、伯爵夫人の侍女スザンナとの結婚を目前にしている。ところが、伯爵は封建領主の特権である「初夜権」をスザンナに行使しよう目論む。それを知ったフィガロは伯爵を懲らしめる。

歌劇「フィガロの結婚」 K.492より  
1786年5月にウィーンで初演されたオペラ「フィガロの結婚」は、ロッシーニ他がオペラ化している「セビリャの理髪師」の後日物語。前作で理髪師だったフィガロはアルマヴィーヴァ伯爵の恋を成就させた手柄により伯爵の召使にとりたてられ、伯爵夫人の侍女スザンナとの結婚を目前にしている。ところが、伯爵は封建領主の特権である「初夜権」をスザンナに行使しよう目論む。それを知ったフィガロは伯爵を懲らしめる。

“恋とはどんなものかしら”  
伯爵家の小姓ケルビーノは伯爵夫人に仄かな恋心を抱き、まだ見ぬ恋に憧れて、このアリアを歌う。オペラではズボン役といって、変声期前の少年役は女性歌手が扮する。これはその代表的なアリア。

“もしも踊りをなさりたければ、伯爵様”

伯爵が自分の婚約者によからぬ思いを抱いていることを知ったフィガロは「伯爵さまが踊りをなさりたければ、私がギターで伴奏して差し上げましょう。…あの手この手で、どんな企みもひっくりかえしてやるぞ」と歌い、伯爵への挑戦心を表明する。

“5・・・10・・・20・・・30”

フィガロとスザンナがこれから新婚生活を始める伯爵邸の一室。フィガロは巻き尺を手にして部屋の寸法を測り、スザンナは鏡に向かって。「何を図っているの?」「伯爵さまがベッドをくださるというから、この部屋に入るか測ってるんだ」「伯爵さまの真の狙いはね、私を手に入れたらいいことなの」「なんだって!」スザンナから伯爵の下心を知らされたフィガロはその阻止を決意する。

“恋人よ早くここへ”

第4幕、夜の庭園で伯爵夫人に扮したスザンナが伯爵を待っている。伯爵夫人と結託しての計略なのだが、それを知らないフィガロは彼女の貞節を疑い、近くに潜んでスザンナのようすを窺っている。それに気づいているスザンナはいかにも伯爵を慕っているかのようなふりをしてこのアリアを歌い彼の嫉妬心をあおる。だがもちろん、彼女の恋心はフィガロに向けられている。

歌劇「ドン・ジョヴァンニ」 K.527より “窓辺においで”

1787年10月にブラハで初演された「ドン・ジョヴァンニ」は稀代の女性の敵ドン・ジョヴァンニの地獄落ちの物語。元妻エルヴィーラに追い回されたドン・ジョヴァンニは彼女の小間使いに目をつけ、従者レポレッロに自分の衣裳を着せてエルヴィーラを誘い出させ、その隙に窓辺でこのセレナードを歌って小間使いを口説く。

歌劇「ドン・ジョヴァンニ」 K.527より／戸田 有里子 編

1787年10月にブラハで初演されたモーツァルトのオペラ《ドン・ジョヴァンニ》は、恋の享楽のためにドンナ・アンナの父親の騎士長を殺害したドン・ジョヴァンニが、その後も次々と恋の冒険を楽しむものの、最後は自分の殺した騎士長の亡霊によって地獄へ落とされるという波瀾の物語。その大団円ではドンナ・アンナと婚約者ドン・オッターヴィオ、ドン・ジョヴァンニの元妻ドンナ・エルヴィーラ、誘惑されかけたツェルリーナとその婚約者マゼット、ドン・ジョヴァンニの従者レポレッロが「これぞ悪事をなす者の最期。そして不誠実な者の死はその生と似つかわしいものになる」と歌って幕となる。

[萩谷 由喜子]

## オーケストラ コンサート II ベートーヴェン・コンチェルトの夕べ

メインホール 17:00開演 (19:00頃終演予定)

L.v.ベートーヴェン

L.v.Beethoven

「コロオラン」序曲 Op.62

“Coriolan” Overture Op.62

ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 Op.61

Violin concerto in D Major Op.61

- I Allegro ma non troppo
- II Larghetto
- III Rondo : Allegro

郷古 廉 (ヴァイオリン)

～休憩～

ピアノ協奏曲 第3番 ハ短調 Op.37

Piano concerto No.3 in C minor Op.37

- I Allegro con brio
- II Largo
- III Rondo : Allegro

菊池 洋子 (ピアノ)

下野 竜也 (指揮)

朝岡 聡 (ナビゲーター)

東京交響楽団 (管弦楽)

L.v.ベートーヴェン (1770～1827)

「コロオラン」序曲 Op.62

全部で11曲あるルードヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェンの序曲のうち、劇やオペラ本編を持たない演奏会用序曲は「命名祝日」とこの「コロオラン」のみである。コロオランとは、紀元前5世紀頃のローマの英雄コロオラヌスのドイツ語読み。政治抗争に敗れて国外追放されたコロオラヌスは隣国ヴォルシアの将軍に迎えられ、ヴォルシア兵を率いてローマに攻め入る。だが、母親と妻から「ローマを滅ぼしてはならぬ」と諫められて独断で和平を結び、ヴォルシアの刺客に暗殺される。この英雄悲劇をもとにウィーンの宮廷秘書官ヨーゼフ・コリンが戯曲「コロオラン」を書き、その戯曲に感激したベートーヴェンが一気にこの序曲を書き上げてコリンに献呈した。作曲時期は交響曲第4番、第5番、第6番、ピアノ協奏曲第4番、ヴァイオリン協奏曲などと同じ1807年。曲は交響曲第5番の第1楽章と同様のアレグロ・コン・ブリオ、ハ短調、ソナタ形式。冒頭動機の徹底的な使い回しにも類似点がある。

ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 Op.61

ベートーヴェン唯一のこのヴァイオリン協奏曲は1806年に作曲され同年12月に初演された。初演時のソリストはフランツ・クレメントだが、彼が技巧派ではなかったことも一因となつてか、好評を得られなかった。この曲が脚光を浴びるのはベートーヴェン没後の1844年5月に当時12歳11ヶ月のヨーゼフ・ヨアヒム (1831-1907) がメンデルスゾーンの指揮でこれを再演して以来のことになる。華麗な名人芸で聴衆をあっといわせる作品ではないが、雄渾な楽想と気高い精神性によって聴き手の内奥に訴える作品であるだけに、真に力量のあるヴァイオリニストによって演奏されたときの効果は絶大だ。

第1楽章:アレグロ・マ・ノン・トロポ、ニ長調、4/4拍子、協奏風ソナタ形式。ティンパニのD音のロール打ちから静かに開始され、このリズムが楽曲全体を支配する。次いでフルートを除く木管が雄大な第1主題と柔らかな第2主題を呈示したのち、ソロがカデンツァ風のパッセージから登場する。

第2楽章:ラルゲット、ト長調、4/4拍子、変奏曲形式。弱音器をつけた弦が美しい主題を呈示し、これにクラリネットとソロが対話する第1変奏、ファゴットが主題を受け持つ第2変奏、オーケストラが主役となる第3変奏が続く。最後は切れ目なしに第3楽章へと入る。

第3楽章:アレグロ、ニ長調、6/8拍子、ロンド形式。冒頭、ソロが再低音弦G線で躍動的なロンド主題を示す。この主題を中心として華やかなフィナーレが繰り返し広げられる。

ピアノ協奏曲 第3番 ハ短調 Op.37

1792年の秋に故郷ボンからウィーンへ出たベートーヴェンは、まず卓越したピアニストとしてその名を高めた。次に作曲家としての成功を目指した彼は得意の楽器ピアノを含む各種の室内楽曲、ピアノ・ソナタ、そして協奏曲を次々と書いていった。5曲ある協奏曲のうち、この第3番は1797年頃からスケッチが開始されたもので、6年後の1803年に完成した。同年4月5日、彼自身がピアノ・ソロを担当して初演された。彼の全協奏曲中、唯一短調、しかも「運命」交響曲と同じくハ短調で書かれているが、暗さや悲痛さは感じられず、雄渾でたくましく、しかも胸の奥に切々と訴えかけてくるような深い情感にみちている。

第1楽章:アレグロ・コン・ブリオ、ハ短調、4/4拍子、協奏的ソナタ形式。まず弦が問い掛け木管がこれに応えると、全オーケストラがこの対句をまとめて受け、やがて長調へと転じさせる。第1ヴァイオリンとクラリネットが受け持つ第2主題は一転してのびやかなもの。ソロは華やかな楽句を伴って登場する。

第2楽章:ラルゴ、ホ長調、3部形式。平行長調でも同主長調でもなく、長3度上のホ長調で書かれた緩徐楽章。夢幻的な美しさに満ちている。

第3楽章:アレグロ、ハ短調、ロンド形式。再びハ短調で書かれたフィナーレ。微かな焦燥感のあるロンド主題の間に軍隊行進曲風のエピソードが挟まれている。

[萩谷 由喜子]